

定校 平家物語百二十句本

凡 例

一、本書は、京都府立資料館蔵の百二十句本を翻印したものである。

一、本書の底本は、一面十行平假名名草體である。まゝ漢字を用い、又濁點を附したところもある。翻印にあつては、底本のままに忠實に翻印したが、二三の點を改めたところがある。

すなわち、假名遣いのあやまりはそのままとしたが、濁點を施し、卷一は朱點で句讀點があるのをそのままに用い、卷二以下は適宜に句讀點を加えた。又誤字のところには傍にカツコを施して、正しき字を示し、脱字のところには、カツコして、適當な文字を補つた。

一、目錄は各卷頭にあるが、本書では、卷頭にあつてこれを集録した。

一、章段は本來なかつたものであるが、あるものは底本にしたがつてそのままに設けることとした。

一、卷末の解説は、百二十句本平家物語の性格を中心としたものである。

一、本書の印行にあつて、特別な御配慮をいただいた府立資料館長西村精一先生に深く感謝を申しあげます。

昭和四十一年二月十八日

高 橋 貞 一 識

平家卷第一

第一句

てん上のやみうち……………一〇四
じよ

たゞもりしうでん

たゞもりすゑながいゑなり五せつのまひ

たゞのりのはゝの事

第二句

さんだい上ろく……………一〇九

たゞもりしきよ

きよもりくはんと

きよもり五十一しゆつけの事

かぶろのさた

第三句

二だいきさき……………一一四

きう中に御ゑんしよの事

二くはのぎようのさた

きさき御じゆたい

きさきしやうじの御うたの事

第四句

がくうちろん……………一一八

二でうのゐんわうじしんわうせんじの事

二でうのゐんほうぎよ廿三

きさき御しゆつけの事

きよみづゑんじやう

第五句

ぎわう……………一二三

いもうどのぎによが事

はゝのどちの事

ほとけ御ぜんの事

しらびやうしのいんゑん

第六句

ぎわうしゆつけ……………一二三〇

ぎによしゆつけ

とちしゆつけ

ほとけしゆつけ

四人ごしら川のほうわうのくはこちやうに

ある事

第七句

てんがのりあひ……………一三四

ごしら川のあん御ほつたいの事

さゑもんにう道さいくはう、きんじゆさう

くの事

しゆじやうたかくらのめん御そくゐ、すけもり

いせの國へをつくださるゝ事

第十句

くはんばくどの御くうぎよの事

みこしふり……………一五一

わたなべのちやう七となふ、よりまざのつか

ひする事

平大なごんときたゞさんもんちよくしの事

もろたかもろつね御さいだん

だいらそのほか京中しうしつの事

第八句

なりちか大しやうむほん……………一三九

しゆじやうたかくらのめん御げんぶく

しん大なごんきせい

もろつねらうぜき

はくさんみこしひがしさかもとへじゆぎよ

第九句

きたのまんどころせいぐはん……………一四七

ちうめんほうしこ二でうのくはんばくどの

じゆそ

くはんばくどの御やまひの事

くはんばくどのへいゆうの事

平家卷第一

てん上のやみうち

ぎをんしやうじやの、かねのこゑ、しようぎやうむじやうのひゞきあり。しやらさうじゆの、花のいろ、せいじやひつすいの、ことはりを、あらはす。おごれるものも、ひさしからず、たゞはるの夜の、ゆめのごとし。たけきものも、つめにはほろびぬ、ひとへに風のまへの、ちりにおなじ。とをくいてうを、とぶらへば、しんのてうかう、かんのわうまう、りやうのしうい、たうのろくさん、これらはみな、きうしゆ、せんわうの、まつりごとにも、したがはず、たのしみをきはめ、いさめをも、おもひいれず、てんがのみだれん、事をも、さどらずして、みんかんのうれふる、ところを、しらざりしかば、ひさしからずして、ほろびしものどもなり。ちかくぼんてうを、うかゞふに、しうへいのまさかど、てんぎやうのすみども、かうわのよしちか、へいちののぶより、これらはみな、おごれる事も、たけき心も、みなとりぐにこそ、ありしが、まちかくは、六はらの入道、さきの太じやう大じん、たいらのあそん、きよもりこうと、まうせし人の、ありさま、つたへきくこそ、心もことばも、をよばれぬ。そのせんぞを、たづぬれば、くはんむ天わう、だい五のわうじ、一ぼんしぶきやう、かつらばらのしんわう、九だいのこういん、さぬきのかみ、まさもりがまご、ぎやうぶきやうたゞもりのあそんの、ちやくなんなり。かのしんわうの御こ、たかみのわう、むくはんむゐにして、うせ給ひぬ。その御こ、たかもち

のわうのとき、はじめて、たひらのしやうを、給りて、かづさのすけに、なり給ひしより、このかた、たちまちに、わうじをいでてじんしむにつらなる。そのこ、ちんじゆふのしやうぐん、よしもち、のちには、ひたちの大じう、くにかとあらたむ。くにかより、まさもりまで、六代は、しよこくのじゆりやう、たりしかども、てんじやうのせん(せ)きをば、いまだゆるされず。しかるに、たゞもりいまだびぜんのかみたりしとき、とばのみの御ぐはん、とくちやうじゆみんを、ざうしんし、三十三げんのみだうをたて、一千一たいの、みほとけをすえたてまつる。くやうは、天しう元年、三月十三日なり。くはんしやうには、けつこくをたまはるべきよし、おほせくだされける。おりふし、はりまのくにの、あきたりけるをぞ、給りける。しやうくわう、御かんのあまりに、うちのしうでんをゆるさる。たゞもり三十六にて、はじめて、しうでんすくもの上人、これをそねみ、いきどをり、おなじきとしの、十一月廿三日、五せつの、とよのあかりの、せちゑの夜、たゞもりを、やみうちにせんとぞ、ぎせられける。たゞもり、此よしをつたへきゝて、われゆうひつの身にあらず、ふゆうのいゑにむまれて、いまふりよのなんに、あはん事、身のため、いゑのため、心うかるべし。せんずるところ、身をまたふして、君につかへよといふ、ほんもんありとて、かねてようゐをいたす。さんだいのはじめより、おほきなる、さやまきを、そくたいのしたに、さし、ひのほのぐらきかたにむかひて、此かたなをぬきいだし、びんにひきあてけるに、よそよりは、こほりなどのやうに、見えたり。しよにんめをぞすましける。そのうへ、たゞもりのらうどう、もとは一もんたりし、たひらのむくのすけ、さだみつ

がまご、しんの三郎大夫、いゑふさが子に、さひやう衛のじう、いゑさだといふものあり。とくさいろのかりぎぬのしたに、もえぎおどしのはらまきをきて、つるぶくろつけたる、たちわきばさみ、てんじやうのこにはかしこまつてぞ候ひける。くわんじゆいげ、あやしみをなし、うつをばしらよりうち、すゞのつなのへんに、ふうみのものゝ候は、なにもぞ。まかりいでやらうぜきなりと、六位をもつて、いはせられたりければ、いゑさだかしこまつて、さうでんのしう、びぜんのかうのどのゝ、こんややみうちにせられ給ふべきよし、つたへうけたまはつて、そのならんやうを見んとて、かくて候。えこそ、まかりいづまじふ候へとて、かしこまつて候ければ、これらをよしなしとやおもはれけん、その夜のやみうちは、なかりけりたゞもり又御ぜんのめしによて、まはれけるを、人々ひやうしをかえて、いせへいじは、すめなりけるとぞ、はやされける。かけまくもかたじけなくも、此人は、かしはばらのてんわうの御すゑとは申ながら、なかごろは、みやこのすまゐも、うとくしく、おげにのみふるまひなつて、いせのくに、ぢうこくふか、りければ、そのくにのうつはものにことよせて、いせへいじとぞはやされける。そのうへたゞもりの、めのすがまれたりければ、かやうにははやされるなり。たゞもりいかにすべきやうなくて、御まへをまかりいでられけるが、しゝむでんのうしろにして、かたへのでんじやう人の、見給ふまへにて、とのもつかさをめして、よこたへさゝれたりけるかたなを、あづけをきてぞいでられける、いゑさだまちうけて、さていかゞ候けるやらんと申ければ、たゞもりかくともいはまほしくは、おもはれけれどもいひいづるものなら

ば、てんじやうまでも、きりのぼらんずるものゝ、つらたましみにてあるあひだ、べちの事なしとぞ、こたへられける。五せつには、しろうすやう、こせんじのかみ、ともへかきたるふでのちくなんど、さまぐゝ、おもしろき事をのみ、うたひまはれしに、なかごろ、だざいのごんのそつ、すゑなかのきやうといふ人あり。あまりにいろのくろかりければ、見る人くろそつとぞ申ける。この人いまだ、くらんどのかみたりしとき、これも五せつにまはれるに、人々ひやうしをかえて、あなくろくゝ、くろきとふかな、いかなる人の、うるしぬりけんとぞ、はやされける。又くはざんのあんの、さきの大じやう大じん、たゞまさこう、いまだ十さいと申せしとき、ちゝ中なごん、たゞいゑのきやうに、をくれ給ひて、みなしごにて、おはせしを、こなかのみかど、とう中なごんかせいのきやう、そのときはいまだ、はりまのかみたりし時、むこにとりて、はなやかにもてなし給ひければこれもひやうしをかえて、はりまよねは、とくさか、むくのはか、人のきらをみがくはとぞ、はやされける。しやうこには、かやうの事どもありしかども、こといでこす。まつだいいかゞあらんずらん、おぼつかなしとぞ、人々申あはれる。あんにたがはず、五せつはてにしかば、てんじやう人一どうにうつたえ申されけるは、それゆうけんをたいして、こうゑんにれつし、ひやうぢやうをたまはりて、きうちうをしゆつにうするは、みなかくしきのれいをまぼる、りんめいよしあるせんきなり。しかるに、たゞもり、あるはさうでんのらうじうとがうして、ふうみのつはものを、てん上のこにはめしをき、その身はこしのかたなをよこたへ、さして、せつゑのざにつらなる。りやうでうきだい、いま

だきかざるらうぜきなり。ことすでてうぐせり。ざいくわもつとものがれがたし。はやく御ふだをけつりて、けつくわんちやうにんに、おこなはるべきよし、一どうにうつたえ申しけり。しやうくはう大きにおどろかせ給ひて、たゞもりをめして、御たづねあり。ちんじ申されけるは、まづらうじう、こにはにしこうの事、まつたくかくごつかまつらず。たゞしきんじつゝあひたくまるゝよし、ねんらいのけにん、つたへうけ給るによつて、そのはぢをたすけんがために、たゞもりにしらせずして、ひそかにさんこうのう、ちからおよばぬしだいなり。つぎにかたなの事は、とのもづかさにあづけをきをはぬ。めしうだされて、かたなのじつぶによて、とがのさうあるべきかと申。しかるべきとて、かたなをめしうだし、ほうわうゑいらんあるに、うへはさやまきの、くろくぬりたりけるに、中はきがたなに、ぎんぱくをぞ、をしたりける。たうぎのちじよくを、のがれんがために、かたなをたいするよしあらはすといへども、ごにちのそしうをぞんぢして、きがたなをたいしける、ようゐのほどこそしんめうなれ。きうせんにたづさはらんものゝ、はかりごとは、もつともかうこそ、あらまほしけれ。かねて又らうじう、こにはにしこうのう、かつうはぶしのらうじうのならひなり。たゞもりが、とがにあらずとて、かへりてゑいかにあづかりしうへは、あへてざいくはのさたまなかりけり。そのこどもは、しよゑのすけになりて、しうでんしけるに、てん上のまじはりを、人きらふにをよはず。そのころ、たゞもりびぜんのくにより、のぼりたりけるに、とばのあん、あかしのうらは、いかにとおほせければ、たゞもり、

ありあけの月もあかしのうら風に、なみばかりこそよると見えしか

と申たりければ、御かんありて、やがて此うたをば、きんようしうにぞ、いれられける。又そのころ、たゞもり、せんとうに、さいあいの子ばうあり。かよはれけるがあるとき、かの女ばうのつばねに、つまに月いだしたりけるあふぎを、わすれてぞ、いでられける。かたへの女ばうたち、いづくよりの月かげぞや、いで所おぼつかなしなんど、わらひあはれければ、かの女ばう、

くも井よりたゞもりきたる月なれば、おぼろけにてはいはじとぞおもふとよみたりければ、いとゞあさからずそ、おもはれける。さつまのかみたゞのりのはゝこれなり。にたるをともとかやの、ふぜいにて、たゞもりも、うたにすいたりければ、此ねうばうも、ゆうなりけり。

さんたい上ろく

たゞもりぎやうぶきやうにいたつて、仁平三年、正月十五日、とし五十八にて、うせ給ひぬ。きよもりちやくなんたるによて、そのあとをつぐ。保元元年、七月に、うぢのさ大じんの、よをみだり給ひしに、あきのかみとて、みかたにて、くんかうありしかば、はりまのかみに、うつりて、おなじき三年に、ださい大にゝなり、つぎに平治元年、十二月のぶよりのきやうの、むほんのとき、又みかたにて、さきをかけたりければ、くんこうひとつにあらず、おんし

やうこれおもかるべきとて、つぎのとし、正三めに、じよせられ、うちつゞき、さいしやうゑふのかみ、けんびいしのべつたう、中なごん、大なごんに、へあがりて、さうをへずして、ない大じんより、太じやう大じん、じう一みにあがる。大しやうにあらねども、ひやうぢやうを給りて、ずいじんをめしぐして、ぎつしやれんじやにのりながら、きうちうをいでいりぬ。ひとへに、しつせいしんののごとし。大じやう大じん、これ一人のしはんとして、四かいにぎけいせり。くにをおさめ、みちをろんじ、いんやうをやはらげおさむ。その人にあらずんは、すなはちかけよといへり。さればそくけつのくはんともなづけられたり。その人ならでは、けがすべきくはんならね共、一天四かいを、たなごゝろに、にぎり給ふうへは、しさいにをよばず。そもくへいけかやうに、はんじやうせられける事を、いかにといふに、くま野のごんげんの御りしやうにてぞ、ありける。そのゆへは、きよもり、いまだあきのかみにて、おはせしとき、いせの国、あの、津より、ふねにて、くまのへまいられけるに、大きな、すゞぎの、ふねにおどりいたりけるを、せんだち申けるは、むかししうのぶわうの、ふねにこそ、はくぎよは、おどりいりて候へしか。これをばまいるべしと、申されければ、さしもの、しやうじんけつさいのみちなれども、みづからてうみして、わが身くひ、いへのこ、らうどうにも、くはせられけるゆへにや、しそん（の）くはんども、りうのくもにのぼるよりも、なをすみやかなり。九だいの、おんしうこえ給ふこそ、めでたけれ。かくてきよもり、仁安三年、十一月十一日とし、五十一にて、やまひに、おかされたちまちに、しゆつけにうだうす。ほふみやうを、じやうかいとこそな

のられけれ。そのしるしにや、しゆくびやうたちどころにいゑて、天めいをまたふす。人のしたがつく事、ふく風のくさ木をなびかすがごとし。世のあまねくあふげる事も、ふるあめのこくどをうるほすにおなじ。六はらどの、御一けのきんだちとだに、いひてんしかば、かたをならべ、おもてをむかふるものもなし。にう道しやうこくのこじうと、へい大なごんときたゞのきやう、の給ひけるは、此一もんにあらざらんものは、にんびにんたるべしとぞの給ひける。されば、いかにもして、この一もんに、むすぶふれんとぞ、しける。ゑもんの、かきやうよりはじめて、ゑぼしの、ためやうにいたるまで、六はらやうとだに、いひてんしかば一天四かいの人、みなこれをまなぶ。いかなる、けんわう、けんしゆの、御まつりごと、せつしやう、くはんばくの、御せいはいをも、世にあまされたる、いたづらものなどの、かたはらにて、そしりかたづけ申事は、つねのならひなれども、此ぜんもんの、世ざかりのほどは、いさゝか、いるがせにも申ものなし。そのゆへは、にう道しやうこく、はかりごとに、十四五六ばかりの、わらんべを、三百人そろへて、かみをかぶろに、きりまはし、あかきひたゝれをきせて、めしつかはれけるが、京中にみちゝて、わうはんしけり。おのづから、へいけの御事を、あしざまに、申ものあれば、一人きゝいださるゝほどこそあれ、三百人にふれまはして、そのいへにみだれいり、しざいざうぐをついぶくして、そのやつをからめて、六はらへいてまいる。さればめに見、心にしるといへども、ことばにあらはして、申ものなし。六はらどのの、かぶろとだにいひてければ、みちをすぐる、むまくるまも、みなよけてぞ、とをしける。きんもんをし

ゆつにうすといへども、せいめいをたづねらるゝにをよはず。けいしのちやうり、これがために、めをそばむと、見えたり。わがみ、ゑいぐわをきはめ給ふのみならず、一もんみなはんじやうして、ちやくししげもり、ない大じんさ大しやう、二なんむねもり、中なごんう大しやう、三なんとももり、三みの中將、四なんしげひら、くらんどのかみ、ちやくそんこれもり、四あのせう將、すべて一もんのくぎやう十六人、てん上人四十よ人、そのほかしよこくのじゆりやう、ゑふしよし、つがう六十よ人なり。よには又人なきとぞ見えたりける。むかしならのみかどの御とき、じんき五年、このゑの大しやうを、はじめをかれてより、このかた、きやうだいさうにあひならぶ事、わづかに三四かどなり。もんどく天わうの御とき、ひだりによしふさ、う大じんのさ大しやう、みぎによしすけ、大なごんのう大しやう、これはかんあんのさ大しやうふゆつぐこの御子なり。しゆじやくあんの御うに、ひだりにさねより、をのゝみやどの、みぎにもろすけ、九でうどの、ていしんこの御こなり。これんぜいあんの御とき、ひだりにのりみち、大二でうどのみぎによりむねほりかはどの、みだうのくはんばくの、御こなり。二でうあんの御とき、ひだりにもとふさまつどの、みぎにかねざね月のわたの、これはみなせうろくのしんの、御しそくなり。ほん人にとりては、そのれいなし。てん上のまじはりをだに、きはれし人のしそんにて、きんじきざつはうを、ゆるされ、りうらきんしうを、身にまどひ、大じんの大しやうになつて、きやうだいさうに、あひならぶ事、まつだいといひながら、ふしぎなりし事共なり。そのほかにう道しやうこくの、おんむすめ八人おはしき。みなとり

ぐに、さいはひし給ふ。一人ははじめはさくらまちの中なごん、しげのりのきやうのきたのかたにて、おはすべかりしが、八さいのとし、平治のみだれいご、ひきちがへられ、のちにはくはざんのみん、さ大じんどのゝみだいどころに、ならせ給ひて、きんだちあまた、ましゝけり。そもゝ此しげのりのきやうを、さくらまちの中なごんと申ける事は、すぐれて心すき給へる人にて、つねは、よし野の山をこひつつ、ちやうにさくらをうえならべ、そのうちに屋をたてゝ、すみ給ひければ、見る人さくらまちとぞ申ける。さくらはさきて、七か日にちるを、なごりをおしみ、あまてる御かみに、いのり申されければにや、三七日まで、なごりあり。きみもけんわうにて、ましゝければ、しんもしんとくを、かゞやかし、花も心ありければ、廿日のよはひを、たもちけり。一人は、きさきにたゝせ給ふ。わうじ御たんじやうありて、くはうたいしに、たち、くらみにつかせ給ひしかば、あんがうかうぶらせ給ひて、けんれいもんゐんとぞ申ける。一人は六でうのせつしやうどのゝ、きたのまんどころに、ならせ給ふ。一人はふけんじどのゝ、きたのかたにならせ給ふ。一人はごしうかはのほうわうに、まいり給ひて、ねうごのやうにて、まします。これはあきのいつくしまの、ないしがはらのひめきみなり。一人はれんぜいの大なごん、たかふさのきやうの、きたのかたに、ならせ給ふ。一人は七でうのしゆりの大夫、のぶたかのきやうに、あひぐし給ふ。そのほか、九でうゐんのさうし、ときはがはらにも一人、これはくはざんのあんどのに、まいらせ給ひて、上らうねうばうにて、らうの御かたとぞ申ける。日ぼんあきつしまは、わづかに六十六かこく、平家ちぎやうの國、三十

やうせう―揚州。

てんけん―朝權。

よかこく、すではんこくに、こえたり。そのほか、しやうゑん、でんぼく、いくらといふかずをしらず。きらみちくゝて、たう上花のごとし。けんきくんじゆして、もんぜんいちをなす。やうせうのこがね、けいせうの玉、ごぐんのあや、しよくかうのにしき、七ちんまんぼう、ひとつとして、かけたる事なし。かだうぶかくのもとひ、ぎよりうしやくばの、もてあそび、おそらくは、ていけつせんとうも、これにはすきじとぞ、見えし。むかしより、いまにいたるまで、げんべいりやうし、てうかにめしつかはれて、わうくはにしたがはず、てんけんをかるんずるものには、たがひにいましめをくはへしかば、世のみだれもなかりしに、保元にためよし、きられ、平治によしともちうせられてのちは、すゑくゝのげんじども、あるひはながされ、あるひはうしなはれて、いまは平家の一るいのみはんじやうして、かしらをさしいだす、ものなし。されば、いかならんすゑのよまでもなに事か、あらんとぞ、見えし。

二 だいきさき

とばのみの、御ゑんがののち、ひやうかくうちつゞきて、しぎいるけい、けくはんちやうにん、おこなはれて、かいだいも、しづかならず、せけんも、いまだらくきよせず。なかんづく、ゑいりやく、おうほの、ころより、みのきんじゆしやをば、うちより御いましめあり、うちのきんじゆしやをば、みんより、いましめらるゝあひだ、上下をそれおのゝひて、やすき心もなし。たゞしんゑんにのぞんで、はくひようをふむがごとし。しゆじやう、しやうくはう、ふ

しの御あひだに、なに事の御へだてか、あるべきなれども、おもひのほかの事どもありけり。
しゆじやう、あんのおほせを、つねは、申かへさせまし／＼ける中にも、人じぼくをおどろか
し、よもつて、大きにかたぶけ申事ありけり。そのころ、ここのゑのみんなのきさき、大くはう
大ごうと申せしは、おほみのみかどの、う大じんきんよしの、御むすめなり。せんていに、
をくれたてまつらせたまひてのちは、こん衛がはらの御所にぞ、うつりすませ給ひける。ちや
うくはんのころは、御とし廿二三にもや、ならせまし／＼けん、御さかりも、すぎさせ給ひた
り。されども、てんがだい一の、びじんのきこえまし／＼ければ、しゆじやう、いろにそみたる、
御心して、ひそかにかうりきしに、みことのりして、此大みやへひきもとめしむるに、をよむで、
御ゑんしよあり。大みやあへてきこしめしもいれざりけり。されども、此事ほにあらはれて、
きさき御じゆだいあるべきよし、う大じんけに、せんじをくださる。此事、てんがにをひて、こ
となる、しうじなれば、くぎやうせんぎあつて、をの／＼、いけんを申さる。まづいてうの、せ
んしうをたづぬるに、そくてんくはうぐうは、たうのたいそうのきさき、かうそうくはうてい
の、けいぼなり。たいそうほうぎよの／＼ち、くはうぐうあまになりて、せいこうじといふ、て
らにこもり給へり。かうそう、ねがはくはきうしつにかへり、まつりごとをたすけ給へて、
御つかひかさねて、五たびきたるといへども、あへてしたがはず。みかどせいこうじに、りん
かうなつて、ちんまつたく、わたくしの心ざしを、とげんとにはあらず。せんてい、たいそう
のよを、ながからしめ給へとなり。くはうぐうのたまはく、われないそうのぼだいを、とぶら

はんがために、すでにしやくもんにいりぬ。二たびちんおくに、かへるべからずとて、くはくぜんとして、ひるがへさず。こゝにかうそうのきんしんたち、よこしまに、とりたてまつるごとくにして、くはうぐうを、だいにいれたてまつる。そのゝち、くはうぐうと、かうそうと、二人まつりごとを、めでたふし給ひしかば、じくはの御うとぞ、申ける。かくてみかど世をおさめ給ふ事、三十三年、國とみ、たみゆたかなり。かうそうほうぎよのゝち、くはうぐう、によていとして世をあらためて、ねんがうを、しんこう元年とがうす。此人は、しうわうのまごなるゆへに、大しうそく天大上くはうていとぞ、きこえし。そのゝち、ちうそうくはうていに、世をゆづり給ふ。ちうそうよをあらためて、ねんがうを、しんれう元年とがうす。ざいぬ七年、これはわがてうの、もんむ天わうに、あたり給へり。されども、それはいこくのせんきたるうへ、べちだんの事なり。ほんてうには、じんむ天わうより此かた、にんわう七十よだいにいたるまで、いまだ二だいのきさきに、たち給ふ事、そのれいをきかずと、しよきやう一どうに、申させ給へども、しゆじやう、おほせなりけるは、天しにふぼなし、われ十ぜんのかいこうによて、ばんじうのほうみをたもつ、などかこれほどの事、えいりよにまかせざるべきとて、すでに御じゆだいの日、せんげせられるうへは、ちからおよばせ給はず。大みやかくときこしめされけるより、御なみだにむせばせおはします。せんていにをくれ、まいらせにし、久壽の、あきはじめ、おなじくさばの、つゆともきえ、しゆつけをもし、よをものがれたりせば、いまかゝるうき事は、きかざらましとぞ、御なげきありける。ちゝのおどゝ、こしらへ申させ給ひけるは、

じうめい—詔命。

世にしたがはざるをもつて、きやうじんとすと、見えたり。すでにじうめいをくださるゝうへは、しさいを申にところなし。たゞすみやかに、御じゆだいし給へ。もしわうじ御たんじやうあらば、きみもこくもいはれ、ぐらうもぐはいそと、あふがるべき、ずいさうにてもや候らん。ひとへにぐらうを、たすけさせおはします、御かうくのいたりなるべしと、こしらへ申させ給へども、なを御返しも、なかりけり。大みやそのころ、なにとなき、御てならひの、つゐでに、うきふしにしづみもやらでかはたけの、よにためしなきをやながさん

よにはなにとして、もれたりけん、やさしき御事にぞ、申ける。すでに御じゆだいの日にも、なりしかば、ちゝのおとゞ、ぐぶのかんだちめ、しゆつしやのぎしきなんだ、心のごとく、したてまいらせ給ひける。大みやものうき御いでたちなれば、とくもいで給はず。はるかに、夜ふけ、さよもなかなばになつてのち、御くるまにたすけのせられさせ給ひけり。ことにいるある、御ゑをばめされず、しろき御ゑをぞ、めされける。御じゆだいのゝちは、れいけいでんにぞ、ましゝける。ひたそらあさまつりごとを、すゝめ申させ給ふ御さまなり。かのしゝんでんのくはうきよには、けんせいのしやうじを、たてられたり。いみん、ていごりん、ぐぜいなん、たいこうぼう、ろくりせんせい、りせき、しま、てなが、あしなが、ばぎやうのしやうじ、おにのま、おはりのかみ、をのゝたうふうが、七くはいけんせいのしやうじと、かきたりしも、ことはりとぞ、見えし、かのせいりやうでんの、ゑづの御しやうじには、むかしかなをがゞ、かきたりし、ゑんさんの、ありあけの月も、ありとかや。こゐんのいまだゆうしうにて、まし

しま—司馬。
ばぎやう—馬形。

ゆうしう—幼主。

くけるそのかみ、なにとなき、御てならひに、ありあけの月の、いでけるを、かきくもらかさせ給ひたりしが、ありしながらに、すこしもたがはぬを、御らんじ、せていのむかしもや、御こひしく、おぼしめされけん、

おもひきやうき身ながらにめぐり、きて、おなじくも井の月を見んとは

よには又あはれなる、御事にぞ、申ける。そのあひだの、御なかみ、いひしらず、あはれに、やさしき事どもなり。

がくうちろん

さるほどに、ゑいまん元年の、春のはじめより、しゆじやう、御ふよのよしきこえさせ給ひしが、なつのはじめに、なりしかば、ことのほかに、おもらせ給ふ。これにて、大くらの大夫、いきのかねもりが、むすめのはらにこんじやう一のみやの、二さいにならせ給ふを、たいしにたてまつらせ給ふべしと、きこえしほどに、おなじき六月廿五日、にはかに、しんわうのせんじを、くだされ給ふ。やがてその夜、じゆせんありしかば、天がなにとなふ、あはてたるやうなり。そのとき、ゆうしよくの人々、申あはれけるは、ほんてう、どうていのれいを、たづぬるに、せいわ天わう九さいにして、もんどく天わうの御ゆづりをうけさせ給ふ。これはかのしうこうたんの、せいわうにかはりて、なんめんにして、一日ばんきの、まつりごとを、おさめ給ひしに、なぞらへて、ぐはいそ、ちうじんこう、ゆうしゆを、ふおし給ふ。これぞせつしやうのはじめなる。とばのあん五さい、このゑのあん三さい、これをこそ、いつしかな

ちうけん―澄憲。

りとまうせしに、これは二さいにならせ給ふ。せんれいなき。ものいそがはしとも、おろかなり、七月廿七日、しやうくはうつめに、ほうぎよなりぬ。御とし廿三、つぼめる花の、ちるがごとし。たまのすだれ、にしきのちやうのうち、御なみだにむせばせおはします。御くらゐをさらせ給ふて、はづかに、三十よ日ぞありける。やがてその夜、かうりうじの、うしとら、れんだいの、おく、ふなおか山に、おさめたてまつる。せうなごんにう道のしそく、ちうけん、御さうそうを、見たてまつり給ひて、なくくかうぞ、申されける、

つねにみし君がみゆきをけふとへば、かへらぬたびときくぞかなしき

大みや此たびも、さまでの御さいはいも、わたらせ給はず、此君にさへ、をくれたてまつり給ひしかば、やがて御しゆつけありて、この衛がはらの、御しよへ、うつしまいらせ、給ひける。御さうそうの夜、あんりやくじ、こうぶくじの、大しゆども、がくうちろんと、いふ事をいだして、たがひにらうぜきにをよぶ。一てんのきみ、ほうぎよなりてのち、御むしよへ、わたしたてまつるときは、なんぼく二京の大しゆ、ことくくぶして、御むしよのまはり、わがてらくくの、がくをうつ事あり。まづしやうむ天わうの御ぐはんしよ、あらそふべきてらなければとて、とう大じのがくをうつ。つぎにたにかいこうの御ぐはんとして、こうぶくじのがくをうつ。ほつ京には、こうぶくじとむかひて、あんりやくじのがくをうつ。つぎにてんむ天わうの御ぐはん、あらそふべきやうなし。ちしう大しのさうくとてをんじやうじのがくをうつ。そのほかまつじくの、がくどもうちならぶ。しかるを、さんもんの大しゆ、い

ちしう―智勝。

かおおもひけん、せんれいをそむきて、とう大じのつき、こうぶくじの上に、ゑんりやくじのがくをうつあひだ、なんとの大しゆ、とやせまし、かくやせましと、せんぎするところに、こうぶくじの、さいこんだうのしゆ、くはんをんばう、せいしばうとて、大あくそう二人あり。くはんをんばうは、くろいとおどしのはらまきに、しらえの大なぎなたの、さはづし、せいしばうは、もえきおどしの、はらまきに、こくしつの大だちもつて、二人づんとはしりいで、ゑんりやくじのがくを、きつておとし、さんぐにうちはり、うれしや、なるはたきのみづ、ひはてれども、たえずとうたへやと、はやしつゝ、なんとのしゆとの中へぞいりにける。みかどかくれさせ給ひてのちは、心なき、さうもくにいたるまで、うれへたる、いろにてこそ、あるべきに、このさうどうの、あさましさに、たかきもいやしきも、きもたましみを、うしなつて、四はうへみな、たいさんす。さんもんの大しゆ、らうぜきをいたさば、てむかひすべきところに、心ふかふ、ねらふかたもやありけん、一ことばも、いだしざりけり。同、廿九日の、むまのこくばかり、さんもんの大しゆ、おびたゞしく、下らくすときこえしかば、ぶしけんびいしにしさかもとに、ゆきむかつて、ふせぎけれども、ことゝもせず、をしやぶりらんにうす。又なにもゝ、申しだしけるやらん、一あんさんもんの大しゆに、おほせ、平家をついたうせらるべきと、きこえしかば、ぐんびやうだいに、さんじて、四はうのおんどう、けいごすべしとて、一るいみな、六はらへ、はせあつまる。こまつどの、そのころは、中なごんう大しやうにて、ましゝけるが、たうじな事によて、さる事あるべきと、しづめられけれども、

上下の、しり、さはぐ事おびたゞし。ほうわうも、いそぎ六はらへ御かうなる。さんもんの大しゆ、六はらへは、よせずして、そゞろなる、せいすいじへ、をしよせて、ぶつかくそうばう、うものこさず、みなやきはらふ。これは、さんぬる御さうその夜の、くはいけいのほぢを、きよめんがためとぞ、きこえし。せいすいじは、こうぶくじの、まつじたるによりなり。せいすいじ、やけたりけるあした、らくしよあり。くはんをん、くはきやう、へんじやうちは、いかにとふだをかきて、大もんのまへに、たてたりければ、つぎの日、又りやくごうふしぎ、ちからおよばずと、かへしのふだをぞ、たてたりける。しゆとかへりのほりければ、一あんも、六はらよりくはんぎよなる。しげもりのきやうばかりこそ、御をくりに、まいられけれ。ちゝのきやうは、まいられず。なをも、ようじんのためとぞ、きこえし。しげもりのきやう、御をくりより、かへられたりければ、ちゝのきやう、の給ひけるは、さても、一あん御かうこそ、大きにをそれおぼゆれ。かねても、おほしめより、おほせらるゝむねのあればこそ、かうはきこゆらめ。それにもうちとけ給ふべからすと、の給へば、こまつどの、此事ゆめゝ、御ことばにも、いださせ給ふべからず、なかゝ人に、心つけがほに、あしき御事なり。それにつけても、えいりよにそむかせ給はで、いよく人に、御なさけをほどこさせ給はゞ、しんめい三ぼうのかごあるべし。さあらんにとりては、御身のをそれ候まじとて、たゝれければ、あはれ、しげもりは、ゆゝしふも、おほやうなる物かなと、ちゝのきやうも、の給ひける。一あんくはんぎよのゝち、御ぜんに、うとからぬ、きんじゆたち、あまた候はれけるに、おほせられけるは、さても、ふ

しうぼく―昭穆。

しぎの事を、申しだしたる物かな。おぼしめしやらぬものをと、の給ひければ、あん中のきりものに、さいくはうほうしといふものあり。天にくちなし、人をもつて、いはせよと、申事候。平家もつてのほかに、くはぶん候へば、天の御つけにてもや候らんとぞ、申ける。人々此事よしなし。かべにみゝあり、おそろしゝとぞ、申あはれける。さるほどに、そのとしも、てんがりやうあんなりければ、御けい大じやうゑも、おこなはれず。けんしゆんもんあん、そのころは、いまだ、ひがしの御かたと申ける、その御はらに、一あんのみやおはしけり。同、十二月廿四日、にはかにしんわうのせんじを、かうぶらせ給ふ。あくれば、かいげんありて、にんあんとがうす。ことしは、大じやうゑあるべきとて、そのいとなみあり。おなじく十月八日、きよねんしんわうのせんじをかうぶり給ひし、わうじ、とう三でうにて、とうぐうにたゝせ給ふ。とうぐうは御おぢ六さい、しゆじやうは御おみ三さい、しうぼくにあひかなはず。たゞし、くはんわ二年に、一でうのめん五さい、三でうのめん十一さいにて、とうぐうにたゝせ給ふ。せんれいなきにあらず。しゆじやう、わづかに二さいにて、御ゆづりを、うけさせ給ひて、五さいと申せし、二月十九日、とうぐうせんそ、ありしかば、くらみをすべりて、しんめんとぞ申ける。いまだ御げんぶくもなくして、太じやう天わうのそんがうあり。かんか、ほんてう、これやはじめなるらん。同廿二日、しんてい、大ごくでんにして、御そくゐあり。此君の、くらゐにつかせ給ふは、いよく平家のゑいぐわとぞ、見えし。こくも、けんしゆん、もんめんと申も、平家の一もんにて、おはしけるうへ、とりわきにう道しやうこくの、きたのかた、八で

うの二めどのは、ねうみんの御あねなり、へい大なごん、ときたゞのきやうと申も、女みんの御おとゝにて、おはしければ、ないげにつけて、しつけんのしんとぞ、見えし。げんそうくはうていに、やうきひが、さいはいせしとき、やうこくちうが、さかえしがごとし。世のおぼえ、ときのきこえ、めでたかりき。にう道しやうこく、天がの大せうじを、の給ひあはせられければ、ときの人、へいくわんばくとぞ、申ける。

ぎわう

にう道しやうこく、かやうに、天がをたなごゝろに、にぎり給ふあひだ、よのそしりをも、はゞかり給はず、ふしぎの事をのみ、し給へり。たとへばそのころ、京中に、しらびやうしの上ず、ぎわうぎによとて、おとゝひあり。これはとちといふ、しらびやうしのむすめなり。あねのぎわうを、入道さいあいせられければ、いもうとの、ぎによをも、よの人もてなす事、かぎりなし。はゝとちにも、よきやつくりて、とらせ、まい月、百こく百くはんをぞ、をくられける。いゑのうち、ふつきにして、たのしき事がぎりなし。そもくわがてうに、しらびやうしのはじまりける事は、むかし、とばのみんのぎように、しまのせんざい、わかのみへ、これら二人が、まいいだしけるなり。はじめはすいかんに、たてゑぼし、しろさやまきをさして、まひければ、おとこまひとぞ、申ける。しかるを、中ごろより、ゑぼし、かたなをば、のけられて、すいかんばかりを、もちひたり。さてこそ、しらびやうしとは、なづけけれ。ぎわうが、さいはいの、めでた

き事を、京中のしらびやうしども、つたへきゝて、うらやむものもあり。そねむものもあり。あなめでたの、ぎわうが、さいはいや、おなじあそびのものとならば、たれもあのやうにこそ、ありたけれ。あはれこれは、ぎといふもじをつみて、かやうにめでたきやらん。いざわれらもつみて見んとて、あるひは、ぎ一とつき、あるひは、ぎ二とつき、ぎふく、ぎとくと、いふもあり。ねたむものは、なにとて、もんじにはよるべき。さいはいは、さきのよの、むまれつきにこそ、あるなれとて、つかぬものも、おほかりけり、かくて三とせと申に、京中に又、しらびやうしの上ず、一人いできたり。これはかゞの国のものなり。なをばほとけとぞ、申ける。とし十六とぞ、きこえし。むかしより、おほくの、しらびやうしの、ありしかども、かゝるまひは、いまだ見ずとて、京中の上下、もてなす事、なのめならず。あるとき、ほとけ御ぜん申けるは、われてんがにきこえたれども、たうじさしもめでたふ、さかえさせ給ふ、大じやうにう道殿へ、めされぬ事こそ、ほみなけれ。あそびものゝならひ、なにかはくるしかるべき。すいさんして、見んとて、あるとき、にし八でうへぞ、さんじける。人まいりて、たうじみやこにきこえ候、ほとけ御ぜんこそ、まゐりて候へど、申ければ、なんでうさやうのあそびものは、人のめしにしたがひてこそまいれ。さうなふすいさんするやうある、その上、ぎわうがあらんところへは、かみともいへ、ほとけともいへ、かなふまじきぞ、とく／＼まかりいでよとぞ、の給ひける。ほとけ御ぜん、すげなふいはれたてまつりて、すでにいでんと、しけるを、ぎわう入道殿に、申けるは、あそびものゝ、すいさんは、つねのならひにてこそ候へ、そのうへ、

としもいまだおさなふ候なるに、たま／＼おもひたちて、まいりて候を、すげなふおほせられて、かへさせ給はん事こそ、ふびんなれ。いかばかり、はづかし／＼、かたはらいたく候らん。わがたてしみちなれば、人のうへとも、おぼえず。たとひまひを御らんじ、うたをこそ、きこしめさず共、御たいめんばかりはさぶらひて、かへさせ給はんは、ありがたき御なさけにて、候べしと申ければ、にう道いで／＼さあらば、わごぜがあまりにいふ事なれば、げんざんしてかへさんとして、御つかひをたてられたり。ほどけ御ぜん、すげなふいはれたてまつりて、すでにくるまにのりて、いでけるが、めされてかへりまいりたり。入道いであひたいめんして、けふのげんざんあるまじかりつるを、ぎわうあまりに申すゝむるあひだ、かやうにげんざんしつ。げんざんするほどにては、いかでこゑをも、きかではあるべき。いまやう一つうたへかし。仏御ごぜん、うけ給りさぶらふとて、いまやう一つぞ、うたふたる。

きみをはじめてみるときは、ちよもへぬべしひめこまつ、おまへのいけなるかめおかに、つるこそむれゐて、あそぶめれ

と、をし返し／＼、三べんうたひすまじたりければ、一もんの人々、じぼくをおどろかし、にう道しやうこくも、おもしろげに、おもひ給ひて、わごぜは、いまやうは上ずなり。このちやうにては、まひもさだめてよかるらん。一ばん見ばや、つゞみうちめせとて、めされけり。ほとけ御ぜん、つゞみうたせて、一ばんまふたりけり。ほとけ御ぜんは、かみすがたよりはじめて、みめかたち、よにすぐれ、こゑよく、ふしも上ずなりければ、なじかは、まひもそんずべき。心

もをおよばず、まひすまじたり。

きみがよを、もゝいろといふうぐひすの、こゑのひゞきぞ、はるめきにける

と、うたひて、ふみめぐりければ、にふだうしやうこく、まひにめで給ひて、ほとけに心をうつされけり。ほとけ御せん申けるは、こはさればなに事さぶらふぞや。もとよりわらはは、さいさんのものにて、いだされまいらせ候ひつるを、ぎわう御せんの、申じやうにてこそ、めしかへされて候に、かやうにめしをかれさぶらひなば、ぎわう御せんの、おもひ給はんずる、心のうちこそ、はづかしふ候へ。はや／＼いとまを給はりて、いださせ給へと、申けれども、う道(ま)なんでふそのぎあるべし。たゞし、ぎわうがあるをはゞかるか、そのぎならば、ぎわうをこそ、いださめとの給ふ。ほとけ御せん申けるは、それ又いかでか、さる事候べき。もろともにめしをかれんだにも、かたはらいとう候に、ぎわう御せんを、いだされまいらせて、わらは一人めしをかれ、まいらせなば、いとゞ心うく候べし。をのづからのちまでも、わすれぬ御事ならば、めされて又はまいるとも、けふのいとまをたまはらんとぞ申ける。にう道すべてそのぎあるまじ、たゞぎわう、とく／＼まかりいでよと、御つかひかさねて、三どまでこそ、たてられければ、ぎわうもとより、おもひまうけたるみちなれども、さすがきのふけふとは、おもひよらざりしに、いそぎいづべきよし、しきりにの給ひけるあひだ、はきのごひ、ちりひろはせ、いづべきにこそさだまりけれ。一じゆのかげにやどりあひ、おなじながれをむすぶだに、わかれのみちはかなしきならひなるに、いはんやこれは、此三とせがほど、すみなれしところなれば、なごり

もおしくかなしくて、かひなきなみだぞ、こぼれける。さてしもあるべき事ならねば、いまはかうとて、いでけるがならんあとのかたみにもやと、おもひけん、しやうじに、なく／＼しゆのうたをぞ、かきつけける。

もえいづるもかるゝもおなじ野べのくさ、いづれかあきにあはではつべき

さてくるまにのりて、しゆく所にかへり、しやうじのうちにたふれふし、たゞなくよりほかの事ぞなき。はゝやいもうとこれを見て、いかにや／＼とどひけれ共、とかうの返事にもよばず。ぐしたるをんなにたづねてぞ、さる事ありとも、しりてけり。さるほどに、まい月をくられける、百こく百くわんも、はやとどめられて、いまはほとけ御ぜん、ゆかりのものぞ、はじめ、たのしみさかへける。京中の上下、ぎわうこそ、にう道どのゝ、いとまたまはりていでたるなれ。いざやげんさんして、あそばんとて、あるひはふみをやり、あるひはつかひをたつるものもあり。ぎわうさればとて、いまさら人にげんさんして、あそびたはぶれべきにあらずとて、文をとりいるゝ事もなし。まして、つかひに、あひしらふまでもなかりけり。これにつけてもかなしくて、なみだにのみぞしづみける。かくてことしもくれぬ。あくるはるのころ、にう道しやうこく、ぎわうがもとへししやをたてゝ、いかにぎわうそのゝちなに事がある。さてはほとけ御ぜん、あまりにつれ／＼げに見ゆるに、なにかくるしがるべき。まいりていまやうをもうたひ、まひなんどもまふて、ほとけなくさめよとぞ、の給ひける。ぎわうかへり事にをよばず。なみだををさへて、ふしにけり。にうだうかさねて、つかひをたて、ぎわうなど

返事をばせぬぞ。まいるまじきか。まいるまじくば、そのやうを申せ。じやうかいが、はからふむねありとぞ、の給ひける。はゝとちこれをきゝて、いかにやぎわう御せん、ともかうも、御返じを申せかし。かやうにしたられまいせんよりはといへば、ぎわうなみだををさへて申けるは、まいらんと思ふみちならばこそ、やがてまいらんとも申さめ。まいらざらんものゆへに、なにと御返事を、申べしとおぼえず。このたびめさんにまいらずば、はからふむねありと、おほせらるゝは、みやこのほかへいださるゝか、さらずば、いのちをめさるゝか、此二つにはよもすぎじ。たとひいのちをめさるゝとも、おしかるべきまたわが身かは、又みやこのほかへいださるゝとも、なげくべきにあらず。一たびうきものにおもはれまいらせ、二たびむかふべきにあらずとて、なを御返じを申さず。はゝとちかさねて、けうくんしけるは、あめがしたにすまんのものは、ともかうも、にう道どのゝ、おほせをば、そむくまじき事にあるぞ。おとこ、をんなのゑん、しゆくせいまにはじめぬ事ぞかし。せんねんまんねんと、ちぎれども、やがてはなるゝ事もあり、あからさまとはおもへども、ながらへはつる中もあり。世にさだめなきは、なんによのならひなり。それにわごせは、三とせまで、おもはれまいらせたれば、ありがたき事にこそあれ。此たびめさんにまいらねばとて、いのちをめさるゝまでは、よもあらじ。みやこのほかへぞ、いだされんずらん。たとへみやこをいださるとも、わごせたちは、としわかければ、いかならぬはきのはざまにても、すごさん事やすかるべし。たゞしわがみ、としおいよはひおどろへて、みやこのほかへいだされなば、ならはぬたびのすまぬこそ、かねて思ふにかなしけれ、たゞわれを、みやこのうちにて、すみはてさせよ。それぞこんじやうごしやうの、けうやうにて、あら

んずるといへば、ぎわううしとおもひしみちなれど、おやのめいをそむかじと、なく／＼いでたちける、心の中こそむざんなれ。なみだのひまよりも、

露の身のわかれしあきにきゑはてゞ、又このほにかゝるつらさよ

ひとりまいらむは、あまりに物うしとて、いもうどのぎによをも、あひ具しける。そのほか、しらびやうし二人、そうじて四人ひとつくるまに、のりぐして、にし八でうへぞ、まいりける。ひごろめされける所へは、いれられずして、はるかにさがりたるところに、ざしきをしつらふて、をかれたり。ぎわうこはされば、なに事ぞや、わが身にあやまつ事は、なけれども、すてられたてまつるだにありしに、いまさらざしきをさへ、さげらるゝ事のくちおしさよ、いかにせんとおもふに、しらせじとする、そでのしたよりも、あまりてなみだぞこぼれける。ほとけ御ぜんあはれにおもひ、にう道どのに申けるは、さきにめされぬ、ところにても候はず、これへめされ候へかし。さらずばわらはに、いとまを給りて、いでゝげんざんせんと申けれども、にう道すべて、そのぎあるまじと、の給ふあひだ、ちからおよばで、いでざりけり。にう道いであひたいめんし給ひて、いかにぎわう、なに事がある、さてはほとけ御ぜんが、あまりにつれ／＼げに見ゆるに、なにかくるしかるべき。いまやう一つうたへかし。ぎわうまいるほどでは、ともかくもおほせをば、そむくまじき物をと、おもひければ、おつるなみだををさへて、いまやう一つうたひける。

月もかたぶき夜もふけて、心のおくをたづめれば、ほとけもむかしはぼんぶなり、われらも

つめにはほとけなり、いづれもぶつしやうぐせる身を、へだつるのみこそ、かなしけれ。

と、なく／＼二三べん、うたひたりければ、そのぎになみゐたまへる、一もんのくぎやうてん上人、しよ大ぶさぶらひにいたるまで、みなかんるいをぞ、ながされける。にう道もおもしろげにて、ときにとりては、しんめうに申たり。此のちはめさずとも、つねにまいりて、いまやうをもうたひ、まひなどをもまふて、ほとけをなぐさめよとぞ、の給ひける。ぎわうかへり事にをよばず、なみだををさへていでにけり。おやのめいをそむかじと、つらきみちにおもむき、二たびうきめを、見つるくちおしさよ。

ぎわうしゆつけ

いきて此世にあるならば、又うきめをも見んずらん。いまはたゞ身をなげんと、おもふなりといひければ、いもうとのぎによも、あねの身をなげば、われもともになげんといふ。はゝとちこれをきゝかなしみて、いかなるべしとおぼえず。なく／＼又、けうくんしけるは、まことにわごぜが、うらむるもことほりなり。かやうの事あるべしとも、しらずして、けうくんして、まいらせつる事の、くちおしさよ。たゞし二人のむすめどもに、をくれなば、としおひよはひおとろひたるはゝ、とゞまりてもなにかせむ。われもともに身をなげんなり。いまだしごもきたらぬおやに、身をなげさせん事、五ぎやくざいにやあらんずらん。この世はわづかにかりのやどりなり。はぢてもなにならず、こんじやうでこそあらめ、こしやうでだにも、あくだうへおも

むかん事のかなしさよと、そでをかほにをしあてゝ、さめぐゝとかきくどきければ、ぎわうなみだををさへて、一たんはちを見つる事の、くちおしさにこそ申なれ、まことに、さやうにさぶらはゞ、五ぎやくざいうたがひなし。さらばじがいはおもひとゞまりぬ。かくてみやこにあるならば、又うきめをも見んずらん。いまはみやこのうちをいでんとて、ぎわう、廿一にてあまになり、さがのおくなる山ざとに、しばのいほりをひきむすび、ねんぶつしてぞあたりける。

いもうとのぎによも、あねの身をなげば、ともになげんとだにちぎりしに、ましてよをいとはんには、たれかはをとるべきとて、十九にてさまをかへ、あねと一しよにこもりゐて、ごせをねがふぞあはれなる。はゞとちこれを見て、わかきむすめども、だにもさまをかゆる世中に、としおひよはひおとろへて、しらがつけてもなにかせんとして、四十五にてかみをそり、二人のむすめもろともに、一かうせんじゆにねんぶつして、ひとへにごせをねがふぞあはれなる。かくてはるすぎなつたけて、あきのはつ風ふきぬれば、ほしあひのそらをながめつゝ、あまのとわたるかぢのはに、おもふ事かくころなれや。ゆふ日のかげの、にしの山のはに、かくるゝを見ては、日のいり給ふ所は、さいはうじやうどにてあるなり。いつかわれらも、かしこにむまれて、物をおはで、すごさんずらんと、かゝるにつけても、たゞつきせぬ物は、なみだなり。たそがれどきもすぎければ、たけのあみどをとぢふさぎ、ともしびかすかにかきたてゝ、おやこ三人ねんぶつして、ゐたる所に、たけのあみどを、ほとゝとうちたゝくものいできたり。そのときあまども、きもをけし、あはれこれは、いふがひなきわれらが、ねんぶつしてゐたる

を、さまたげんとて、まゑんきたりてぞあるらん。ひるだにも、人もとひこぬ山ざとに、しばのいほりのうちなれば、夜ふけてたれか、たづぬべき。わづかのたけのあみどなれば、あけずとも、をしやぶらん事、やすかるべし。なか／＼たゞあけていれんとおもふ也。それになさけをかけずして、いのちをうしなふ物ならば、としごろたのみたてまつる、みだのみやうがうを、となへたてまつるべし。こゑをたづねてむかへ給ふなる、しやうじゆのらいがうにてましませば、などかはいんじうなかるべき。あひかまへてねんぶつおこたり給ふなど、たがひに心をいましめて、たけのあみどをあけたれば、まゑんにてはなかりけり。ほとけ御ぜんぞいできたる。ぎわうあれはいかに。ほとけ御ぜんと見たてまつるは、ゆめかやうつゝかやといひければ、ほとけ御ぜんなみだをさへて、かやうの事申は、なか／＼ことあたらしき事にて候へども、申さずば又おもひしらぬ、身ともなりぬべければ、はじめよりして申なり。もとよりわらはゝ、すいさんのものにて、いだされまいらせさぶらひしを、ぎわう御ぜんの申しやうによりてこそ、めしかへされてさぶらひしに、をんなのかひなさば、わが身を心にまかせずして、をしとゞめられまいらせし事、心うくこそさぶらひしか。わ御ぜんのいだされ給ひしを見るに、つけても、いつかわがみのうへとならんと、おもひしかば、うれしとはさらに、おもはず。しやうじに、又、いづれかあきに、あはではつべきと、かきをき給ひし、ふでのあと、げにもとおもひしられて、さぶらふぞや。いつぞや又めされまいらせて、いまやうたひ給ひしにも、おもひしられてこそさぶらひしか。このほど御ゆくゑを、いづくにと、しらざりつるにかやうに、さまを

かえて、一とところにとうけ給りてのちは、あまりにうらやましくて、つねはいとまを申せしかども、にう道殿、さらに御もちひましますさず。つくくものをあんずるに、しやばのゑいぐはは、ゆめのうちのゆめ、たのしみさかへてもなにかせん。にんじんはうけがたく、ぶつけうにはあひがたし。此たびないりにしづみなば、たしやうくはうごうをふるとも、うかびがたし。としのわかきを、たのむべきにもあらず、らうせうふぢやうのさかひなり。いづるいきの、いるをもまつべからず、かげろふいなづまよりも、なをはかなし。一たんのたのしみに、ほこりて、ごしやうをしらざらん事の、かなしさに、けさまぎれいで、かくなりてこそ、まいりたれとて、かつぎたる、きぬを、うちのけたるを見れば、あまになりてぞいできたる。かやうにさまをかへて、まいりたれば、ひごろのとがを、ゆるし給へ。ゆるさんとおほせられれば、もろとも、ねんぶつして、ひとつはちすのみとならん。それもなを心ゆかずば、これよりいづちへもまよひゆき、いかならんこけのむしろ、まつがねにも、たふれふし、いのちのあらんかぎり、ねんぶつして、わうじやうのそくわいを、とげんといひて、そでをかほにをしあて、さめくくと、かきくどきければ、ぎわうなみだををさへて申けるは、まことに、それほどにわごぜのおもひ給ひけるとは、ゆめにもしらず、うきよの中のさがなれば、身のうしどこそ、おもふべきに、ともすれば、わ御ぜんをうらみて、わうじやうをとげん事も、かなふべしとおおぼえず、こんじやうもごしやうも、なまじぬに、しそんじたる心ちしてありつるに、かやうにさまをかえて、おはしたれば、日ごろのとがは、つゆちりほども、のこらず、いまはわうじやう、うたが

いなし。このたびそくはいをとげんこそ、なによりもつて、うれしけれ。われらがあまになりしをこそ、世にありがたきやうに、人もいひ、わが身もおもひしがそれはよをうらみ、身をうらみて、なりしかば、さまをかゆるも、ことはりなり。わ御ぜんの、しゆつけにくらぶれば、ことのかずにもあらざりけり。わごぜはなげきもなし、うらみもなし。ことしはわづかに、十七にこそなる人の、かやうにゑどをいとひ、じやうどをねがはんと、おもひ入給ふこそ、まことの大だうしんとは、おぼえたれうれしかりける、ぜんちしきかな。いざもろともに、ねがはんとて、四人一所に、こもりゐて、あさゆふほとけのまへに、はなかうをそなへよねんもなくねがひければ、ちそくこそありけめども、四人のあまどもみなわうじやうの、そくわいを、とげけるとぞ、きこえし。されば、ごしら川のほうわうの、ちやうかうだうの、くはこちやうにも、ぎわう、ぎによ、ほとけ、とちが、そんりやうと、四人一しよに、いれられけり。あはれなりし、事どもなり。

てんがのりあひ

さるほどに、嘉應元年、七月十六日、一めん御しゆつけあり。御しゆつけの、ちも、ばんきのまつり事を、きこしめされければ、めん中わくかたなし。めんにめしつかはるゝ、くぎやうてん上人、上下のほくめんにいたるまで、くはんぬほうろく、身にあまるばかりなり。されども、人の心のならひにて、なをあきたらず、あはれその人が、うせたらば、そのくにはあきなんず。そ

の人がほろびたらば、そのくほんにはなりなんなどゝ、うとからぬどちは、よりあひくゝ、さゝやきあへり。一ぬんも、ないくおほせなりけるは、むかしより、てうてきをたひらぐるもの、おほしといへども、いまだかやうの事なし。さだもり、ひでさとが、まさかどをうち、よりよしが、さだたふ、むねたうを、ほろぼし、よいいゑが、たけひら、いへひらを、せめたりしも、くはんしやうおこなはるゝ事、わづかにじゆりやうにはすぎざりき。きよもりが、かく心のまゝにふるまふこそ、しかるべからね。これも世のすゑになりて、わうぼうのつきぬるゆへなりと、おぼしめせども、つゐでなければ、御いましめもなし。又平家もあながちに、てうかをうらみたてまつる事もなかりしに、よのみだれそめぬるこんぼんは、さんぬる嘉應二年、十月十六日、こまつどのゝじなん、しん三ゐの中將、すけもり、そのときは、いまだ、ゑちぜんのかみとて、十三になられけるが、ゆきははだれにふりたり。かれのゝけしきも、まことにおもしろかりければ、わがさぶらひども、二三十きばかりめし具して、れんだいのや、むらさきのうこんのぼゞに、うちいでゝ、たかどもあまたすえさせて、うづら ひばり、をつたてくゝ、ひめむすにかりくらし、はくぼにをよび、六はらへこそかへられけれ。そのときの、御せうろくは、まつどのにてぞましくける。中のみかどの、ひんがしのとうみんの、御しよより、御さんだいあり。ゆうはうもんより、じゆぎよあるべきにて、中のみかどひんがしの、とうみんのおほちを、みなみへ、おほみのみかどを、にしへ、御しゆつなる。すけもりのあそん、おほいのみかど、ゐのくまにて、てんがの御出に、はなつきにまいりあふ。てんがの御ともの人

々、なにものぞ、らうぜきなり。御出のあるに、おり候へといひてけれども、あまりにいさみほこりて、世をよともせざりけるうへ、めし具したるさぶらひども、みな甘よりうちの、わかきもの共にて、れいぎこばうを、わきまへたるもの、一人もなし。てんがの御出共いはず、一せつげばのれいぎにもをよばず、かけやぶりて、とをらんとするあひだ、くらさはくらし、てんがの御ともの人々、つや／＼、大じやうにう道のまごともしらず。せう／＼は、又しりたりけれども、そらしらずして、すけもりのあそんを、はじめとして、さぶらひども、むまよりとつてひきおとし、すこぶるちじよくにをよびけり。すけもりのあそん、はう／＼六はらへおはして、そぶしやうこくぜんもんへ、此よしうつたえ申されたり。にう道さいあいのまごにておはします。おほきに、いかつて、たとへてんがなりとも、じやうかいがあたりをは、一どはなどか、ば／＼かり給はさるべき、おさなきものに、さうなふちじよくを、あたへらるゝこそ、いこんのしだいなれ。かかる事よりして、人にはあざむかるゝぞ。此事おもひしらせてまつらではえこそあるまじけてんがをうらみたてまつらばやと、おもふはいかにとの給へば、こまつどの、申されけるは、これはすこしもくるしく候まじ。よりまさ、ときみつ、なんど、申、げんじどもに、あざむかれ候はんには、まことに一もんのちじよくにても候べし。しげもりがこどもにて候はんするものが、てんがの御出にまいりあひたてまつり、のりものよりおり候はぬこそ、びろうに候へとて、その時ゆきむかひたるさぶらひども、みなめしいだし、じこんいごも、なんちらよく心ゑべし、あやまつて、しげもりは、これよりてんがへ、ぶれいのをそれを

こそ、申さんとおもへとの給へば、そのゝちは、にう道しやうこく、こまつ殿には、かくとも
の給ひもあはせられず、かたいなかの、さぶらひどもの、にう道のおほせよりほかは、おそろ
しき事なしとおもふ、なんば、せのをを、はじめとして、つがふ六十よ人、めしよせ、きたる
廿一日、しゅじやう御げんぶくの、御さだめに、てんがさんだいあらんとき、いづくにても、
まちうけたてまつりて、ぜんくずいじんどもが、もとゞりきつて、すけもりが、はちをそゞげ
とぞの給ひける。つはものども、かしこまりうけ給はりてまかりいづ。てんがこれをば、ゆめ
にもしろしめされず、しゅじやうみやう日、御げんぶく、御かくはんはいくはん、御さだめの
ために、御ちよくろに、しばらく御ざあるべきにて、つねの御出よりひきつくろはせ給ひて、
こんどはたいけんもんより、じゅぎよあるべきにて、中のみかどをにしへ、御出なる。六はら
のつはものども、みのくまほり川のへんに、ひたかぶと三百きばかりにて、まちうけたてまつ
り、てんがを中にとりこめ、ぜんごよりときをどつとぞつくりける。ぜんくやずゐじん共が、
けふをはれと、しやうぞくしたるを、あそこをにつかけ、こゝにをつつめ、むまよりとつてひ
きおとし、さんくゝに、れうりやくして、いちくゝにみなもとゞりをきる。ずいじん十人がう
ち、みぎのふしやう、たけもとが、もとゞりもきられてんげり。その中に、とうくらんどの大
夫、たかのりが、もとゞりをきるとて、これはまつたく、なんちがもとゞりと、おもふべから
ず。しうのもとゞりとおもふべしと、いひふくめて、ぞきりてける。そのゝちは、御くるまのう
ちへも、ゆみのはずつきいれなんどして、すだれかなぐりおとし、御うしのしりがひ、むなが

ひきりはなち、さんぐにしたらして、よろこびのときをつくり、六はらへこそまいりけれ。にう道しんめうなりとぞの給ひける。御くるまぞひには、とばのさいづかひ、くにひさ丸といふおのこ、げらうなれども、心あるものにて、やうぐにしたらひ、御くるまつかまつりて、中のみかどの御所へ、くはんぎよなしたてまつり、そくたいの御そでにて、なみだををさへつゝ、くはんぎよのぎしきの、あさましき、申もなか／＼おろかなり。たいしよくはん、たんかいこうの御事は、なか／＼申にをよばず。ちうじんこう、せうせんこう、よりこのかた、せつしやう、くはんばく、かゝる御めにあはせ給ふ事、いまだうけ給りをよばず。これぞ平家の、あくぎやうのはじめなる。こまつ殿、これをきゝ、大きにおどろき、そのときゆきむかひたる、さぶらひども、みなかんだうせらる。をよそはすけもりきくはいなり。せんだんは二ばより、かうばしとこそ見えたれ。すでに十二三にならんずるものは、れいぎ、こばうをぞんぢしてこそ、ふるまふべきに、かくびろうをげんじて、にう道のあくみやうをたて、ふかうのいたり、なんぢひとりにありとて、しばらく、いせの国へをひくださる。されば此大しやうを、君もしんも、御かんありけるとぞきこえし。これによりて、しゆじやう御げんぶくの御さだめ、そのひはのびさせ給ひて、おなじき廿五日あんのてん上にてぞ、御げんぶくの御さだめはありける。せつしやう殿、さてもわたらせ給ふべきならねば、同十一月九日、かねせんじをかうぶらせ給ひて、十四日大じやう大じんにあがらせ給ふ。やがて同十七日、よろこび申ありしかども、世中なをも、にか／＼しうぞ見えし。さるほどに、ことしもくれ、かおうも三年になりにけり。

なりちか大しやうむほん

おなじき三年、正月五日、しゅじやう御げんぶくありて、おなじき十三日、てうきんのぎやうかうありけり。ほふわう女あん、まちうけさせ給ひて、うめかぶりの御よそをひ、いかばかりらうたく、おぼしめされけん、しゅじやう御とし十三さい、にうだうしやうこくの御むすめ、ねうごにまいらせ給ふ。ほふわう御ゆうしのぎなり。そのころ、めうをんあんの、大じやう大じん、ない大じんの、さ大しやうにて、おはしけるが、大しやうをじ、申させ給ひけるときに、とく大じの大なごんじつていのきやうも、しまうあり。そのほか、こ中のみかどの、とう中なごんいゑなりのきやうの三なん、しん大なごんなりちかきやうも、ひらに申されけり。これは、あんの御きしよくよかりければさまぐのいのりをはじめらる。やはたに百人のそうをこめて、しんどくの大はんにやを、七日よませられけるあひだに、かうらの大みやう神の御まへなる、たちばなの木に、おとこ山のかたより、山ぼと二つとびきたりて、くひあふてぞしに、けるはとはこれ、八まんのだい一のししやなり。みやじにかゝるふしぎなしとて、ときのけんげうきうせいほういん、此よしだいりへ、そうもんせられたりければ、じんぎくはんにして、御うらかたあり。おもき御つつしみたゞしきみの御つゝしみにはあらず、しんかのつゝしみ、とぞうらなひ申ける。しん大なごんそれに、をそれをもいたさず、ひるは人めしげければ、よなくほかうにて、中のみかど、からす丸のしゆく所より、かもの上のやしろへ、七夜つゞけて、まいら

れけり。七夜にまんずるよ、しゆく所にげかうして、くるしさに、ちとまどろみたるゆめに、かものかみのやしうへ、まいりたるとおほしくて、御ほうでんのみとををしひらき、ゆゝしふけだかき御こゑにて、

さくら花かもの川風うらむなよ、ちるをばえこそとゞめざりけれ。

しん大なごんなをもそれに、をそれをもいたさず、かもの上のやしうの御ほうでんのうしろなる、大すぎのほらにだんをたてゝ、あるひじりをこめて、百日だきにのほうを、おこなはせられけるに、いかづちおびたゞしくなりて、かのすぎに、おちかゝり、らいくはもえあがつて、みやうちもすでにあやうく見えしかば、かみ人はしりあつまりて、これをうちけしつ。さてかのげほうをおこなひけるひじりを、をひいださんとしけるにわれ百日さんろうの大ぐはんありけふ、七十五日にあたる。まつたくいでまじとて、はたらかず。しやけより此よし、大りへそうもんしたりければ、たゞはうにまかせよと、おほせらるゝあひだ、そのときかみ人、しらつえをもつて、かのひじりがうしろをしらけて、一でうのおほちより、みなみへをひいだしてんげり。かみはひれいをうけ給はずと申に、此大なごんひぶんの大しやうをいのり申されければにや、かゝるふしぎもいできたる。そのころ、じよぬちもくと申は、めん内の御はからひにもあらず、せつしやうくはんばくの、御せいばいにもをよはず、たゞ一かう平家のまゝにてありければ、とく大じくはざんのめんもなり給はず、にうだうしやうこくのちやくなん、こまつどの大なごんのう大しやうにて、ましゝけるが、ひだりにうつりて、じなんむねもり、申なごんにておほしけ

るが、すはいの上らうをちうおつして、みぎにくははられけるこそ、申ばかりもなかりしか。中にもとく大じどのは、一の大なごんにて、くはぞく、ゑいゆう、さいかくゆうちやうに、おはしけるが、こえられ給ひぬるこそ、いこんのしだいなれ。さだめて、御しゆつげなんどやあらんずらむと、人々さゝやきあはれけれども、しばらく世のならむやうを見んとて、ろうきよとぞきこえし。しん大なごんの給ひけるは、とく大じ、くはざんのみんにこえられたらんは、いかゞせん、平家の二なん、むねもりのきやうに、こえられぬるこそ、いこんのしだいなれこれもよろづ、おもふさまなるが、いたすところなり。いかにもして、平家をほろぼし、ほんまうをとげんと、の給ひけるこそ、おそろしけれ。平治にも、ゑちこの申しやうとて、のぶよりのきやうに、どうしんのあひだ、すでにちうせらるべかりしを、こまつどの、やう／＼に申て、くびをつぎたてまつる。しかるにそのおんをわすれ、かゝる心のつかれける、ひとへにてんまのしよみとぞ見えし。ぐはい人なきところに、ひやう具をとゝのへ、ぐんびやうをかたらひをき、そのいとなみのほかはたじなし。ひがし山のふもと、しゝのたにといふところは、うしろは、みみでらにつゞきて、ゆゝしきじやうくはくにてぞありける。これにしゆんくはんそうづのさんごうあり。つねはそのところに、よりあひ／＼、平家ほろぼすべき、はかりごとをぞめぐらしける。あるときほふうも御かうなる。こせうなごんにう道、しんぜいのしそく、じやうけんほういんも、御とも申。その夜のしゆゑんに、じやうけんほういんに、此事、おほせあはせられたりければ、ほういん、あなおそろし、人あまたうけ給り候ぬ。たゞいまもれきこえ

て、天がの御大事にをよび候はんと、あはてきはがれければ、大なごんきしよくかはつて、御まへをさつとたゞれるが、御まへに候ける、へいじをかりぎぬのそでにかけて、ひきたをされたりければ、ほうわうあれはいかにと、おほせければ、大なごんたちかへり、へいじすでにたふれ候ぬと、申されければ、ほうわうゑつぽにいらせおはしまして、ものどもまいりて、さるがうつかまつれと、おほせければ、へいはんぐはんやすより、つといで、あまりにへいじのおほく候に、もちゑいて候と申。しはんくわんそうづ、それをばいかゞつかまつり候べきと申せば、さいくほうほうし、くびをとるにはしかじとて、へいじのくびをとりてぞ、いりにけるかへすぐも、おそろしかりし事どもなり。じやうけんほういんは、あまりのあさましさに、つや／＼物も申されず。よりきのともがらは、たれ／＼ぞ。あふみの中將にう道、ぞくみやうなりまさ、ほつしうじのしゆぎやう、しゆんくはんそうづ、山しろのかみもとかぬ、しきぶの大夫まさつな、平はんぐはんやすより、そうはんぐはんのぶふさ、しん平はうぐはんすけゆき、つのくにのげんじ、たゞのくらんどゆきつなを、はじめとし、ほくめんのともがら、おほくよりきしたりけり。あるとき、しん大なごん、たゞのくらんどゆきつなをよびて、御へんをば、一ばうの大しやうぐんに、たのむなり。此事しおほせつるほどならば、國をもしやうをも、しまうは、こうによるべし。まづゆぶくろのれうにとて、しろぬの五十たん、をくられけり。そもく此ほつしうじのしゆぎやう、しゆんくはんそうづと申は、きやうごくのげん大なごん、まさとしのきやうのまご、きでらのほういんくはんがのこなり。そふ大なごんは、させるゆみ

やをとるいへにはあらねども。あまりに、はらあしき人にて、三でうばうもん、きやうごくの、いゑのまへをば、人をもやすくとをさず。つねは中もんに、たゝずみて、はをくひしぱり、いかつてのみぞ、おはしける。かゝる人のまごなればにや、しゆんくはんも、そうなれども、心もたけく、よしなきむほんにも、くみしてけり。あんげん三年、三月五日、めうをんめんの、大じやう大じんにてんじ給へるかはりに、こまつどの大なごんさだふさのきやうを、こゑて、ない大じんにあがり給ふ。やがて大じやうおこなはる。大じんの大しやう、めでたかりき。そんじやうには、おほみのみかどのう大じんつねむねこうとぞ、きこえし。一のかみこそ、せんどなれども、ちゝうちのおくさふの、御れい、そのはゝかりあり。しやうこには、ほくめんなかりき。しら川ゐんの御とき、はじめてをかれてよりこのかた、ゑふ共あまたさふらひけり。ためとし、もりしげ、わらはより、いまいぬ丸、せんじゆ丸とて、これらはさうなききりものにてぞありける。とばゐんの御ときも、すゑのり、すゑより、ふしどもに、めしつかはれて、つねはでんそうするをりもありなんど、きこえしかども、みな身のほどを、ふるまいてこそありしに、いまのほくめんのともがらは、もつてのほかに、くはぶんにて、下ほくめんより、上ほくめんにあがり、上ほくめんより、てん上のまじはりを、ゆるさるゝものもおほかりけり。かくおこなはるゝあひだ、おごれる心どもゝつきて、よしなきむほんにも、くみしてんげり。こせうなごん入道しんぜいのもと、めしつかひける、もちみつ、なりかげと、いふものあり。もちみつは、あはの國のざいぢやう、なりかげは、きやうのもの、じゆこんいやしき下らうなり。ことねりわらは、

もしはかくごしやなんどにて、めしつかはれけるが、さか／＼しきによりて、もろみつは、さゑもんのじう、なりかげは、ゑもんのじう、二人一どにゆぎゑのじうになりぬ。しんぜいことにあひしとき、二人ともに、しゆつけして、さゑもんにう道はさいくはう、ゑもんにう道はさいけいとて、これらはしゆつけのちも、みんの御くらみあづかりでぞありける。かのさいくはうが子に、もろたかといふものあり。これもさうなききりものにて、けんびいし、五みのじうまで、へあがつて、あんげん元年、十二月廿九日、ついなのもくに、かゞのかみにぞなされける。こくむをおこなふあひだ、ひはうひれいをちやうぎやうし、じんじやぶつじ、けんもんせいかの、しやうゑんをもつたうし、さんぐの事どもにてぞありける。たとへしうこうの、あとをつぐといふとも、おんびんのまつりごとを、おこなふべかりしが、かく心のまゝにふるまふあひだ、同二年なつのころ、こくしもろたかがおと／＼、こんどうはんぐはんもろつね、もくだいにてかゞの國へげちやくのはじめ、こふのへんに、うがはといふ、山でらあり。おりふしじそうども、ゆをわかつて、あびけるを、らんにうして、をひあげ、わがみあび、さう人共、むまのゆあらひなんどぞしける。じそういかりをなして、むかしより、此ところに、くにがたのもの、にふぶする事なし。せんれいにまかせて、すみやかににうぶのあふばうを、とゞめよとぞ申ける。せん／＼のもくだいは、ふかく（で）こそ、いやしまれたれ。たうもくだいは、すべてそのぎあるまじとて、くにがたの、つみでをもつて、らんにうせんとす。じそうどもは、をひいださんとす。たがひにうちあひ、はりあひしけるほどに、もくだい、もろつねが、ひさう

しけるむまのあしをぞ、うちきりける。その、ちは、きうせん、ひやうちやうをたいして、うちあひ、きりあひ、すこくたゝかふ。もくだいかなはじとやおもひけん、ひきしりぞきて、たうこくのざいちやうくはんにな、す千人もよをし、うがはに、をしよせて、ばうしや一うものこさずやきはらふ。うがはと申は、はくさんの、まつじなり。此事うつたえよとて、すゝむらうそう、たれくぞ。ちしやく、かくみやう、ほうだいばう、しやうち、かくをん、とさのあじやりぞ、すゝみける。しら山の、三しや八あんの大しゆ、ことくく、おこりあひ、つがうそのせい、二千よ人、同七月九日、もくだいもろつねが、もとちかふぞ、をしよせたるけふは、曰くれぬ。あすのいくさどさだめて、その夜はよせで、ゆられたり。^(へ)つゆふきむすぶ、あき風は、いむけのそでを、ひるがへし、くも井をてらすいなづまは、かぶとのほしをかゞやかす。あくるうのこくに、をしよせて、ときをどつとぞつくりける。じやうのうちには、をともせず。人をいれて見せければ、みなおちたりと申。大しゆちからをよばで、ひきしりぞく。さらば、さんもんは、^(へ)うつたえんとて、はくさんのしんよを、かざりたてまつりて、ひえいざんへ、ふりあげたてまつる。同八月十二日、むまのこくばかりに、はくさんのしんよ、すでにひえいざん、ひがしきかもとに、つかせ給ふと、いふほどこそありけれ、ほつこくのかたより、いかづちおびたゞしくなつて、みやこをさして、なりのぼるに、しらゆきふりて、ちをうづみ、さん上らく中、をしなべて、ときはの山のこずゑまで、みなしろたへになりにけり。しんよを、まらうどの宮へ、いれたてまつる。まれうど、申は、はくさんめうりごんけんにて、おはし^(マ、)お

ちうしん―重臣。

はします。おもへばふしの御なかなり。まづさたのせいふは、しらず、しやうぜんの御よろこび、たゞ此事にあり。うらしまが七世のまごにあひたりしも(に)マ、すぎ、たいないのものゝ、りやうぜんのちゝを、見しにもこえたり。三千の大しゆ、くびすをつぎ、七しやの神人、そでをつらね、じゝこくゝに、ほつせきねんの、こゑたえず、ごんごだうだんの事ども、なり。さんもんの上がうとう、そうじやうをさゝけて、こくしもろたか、るざいにしよせられ、もくだいもろつねを、きんごくせらるべきよし、そうもんどゞにをよぶといへども、御さいきよなかりければ、さもしかるべき、くぎやうてん上人は、あはれこれは、とくゝ御さいきよ、あるべきものを、さんもんのそしうは、たにことなり、大くらのきやうためふさ、だざいのごんのそつ、すゑなかの卿と申せしは、さしもてうかのちうしんたりしかども、さんもんのそしうによて、るざいせられにき。いはんやもろたかなんどは、ことのかずにやあるべきと、申あはれけれども、大じんはろくをおもんじて、いさめず、せうしんはつみををそれて、申さずと、いふ事なれば、をのゝ、くちをとお給へり。かもがはの水、すぐ六のさい、山ほうし、これぞわが心にかなはぬと、しらかはのみんも、おほせなりけるとかや、とばのみんの御とき、ゑちぜんのへいせんじを、さんもんにつけられけるには、たうざんの御きゑんあさからざるによて、ひをもつて、りとすとせんげせられてこそ、みんぜんをくだされしか。されば、がうのそつの、申されしやうに、そもゝしんよを、おんどうへふりたてまつりて、そしういたさんときには、きみはいかゞ、御はからひ候べきと申されければ、げにもさんもんのそしうは、もだしがたし

とぞ、おほせける。

きたのまんどころせいぐはん

さんぬる、かおう二年、三月二日、みのゝかみみなもとのよしつなのおそん、たうごくあだちのしやうを給ふあひだ、山のくちうしや、ゑんおうを、せつがいます。これにて、ひよしのしやし、ゑんりやくじのじくはん、つがう三十よ人、申ぶみをさゝげてちんとうへさんじける。くはんばく殿、やまとげんじ、なかつかさごんのせう、よりはるに、おほせて、これをふせがせらる。よりはるが、らうどうの、はなつやに、やにはいころさるゝもの八人、きずをかうぶるもの十よ人なり。しやじ、しよし、四はうへちりぬ。これにて、さんもんのしゆと、しさいをそうもんのために、げらくすときこえしかば、ぶしけんびあし、にしきかもとに、ゆきむかつて、をつかへす。さんもんには、大しゆ、七しやのしんよを、こんぼん中だうにふり上たてまつりて、その御まへにして、しんどくの大はんをやを、七日ようで、くわんばく殿を、じゆそしたてまつる。けつぐわんのだうしには、ちういんほういん、かうぎにのぼり、かねうちならし、けいびやくのことばにいはく、われらがけしの二ばより、おふしたてまつるかみだち、ご二でうのくわんばくどのに、かぶらや一つ、はなちあて給へ、大八わうじごんげんと、たからかに、きせいしたりけれ。やがてその夜ふしぎの事ありけり。八わうじの御てんより、かぶらやのこゑいでゝ、わうじやうをさして、なりゆくどぞ人のみゝにはきこえける。そのあした、くはん

ばくどの、御しよのみかうしをあげらるゝに、たゞいま山より、とつてきたるやうに、つゆにぬれたる、しきみ一えだ、みすにたちけるこそ、ふしぎなれ。その夜よりやがて、くはんばく殿、さんわうの御とがめとて、おもき御やまひをうけさせ給ひたりしかば、は、うへ、大とのきたのまんごころ、おほきに御なげきあつて、いやしき下らうのまねをして日よしのやしろに、七日七夜があひだ、御さんろうあつて、いのり申させおはします。まづあらはれての御いのりには、百ばんの、しばでんがく、百ばんのひとへもの、けいば、やぶさめ、すまふ、をのゝ百ばん、百ざのにんわうきやう、百ざのやくしかう、一ちやくしゆはんのやくし、百たい、どうしんのやくし一たい、ならびに、しやか、あみだの、ざうを、をのゝざうりうし、くやうせられけり。又御心のうちに、三つの御りふぐはんあり。御心のうちの事なりければ、人いかでかこれをしりたてまつるべきに、それにふしぎなる事には、八わうじの御まへに、いくらもありける、まいりうどの中に、みちの國より、はるゝとのぼりたる、わらはみこの、夜はんばかりに、にはかにたえ入ぬ。はるかにかきいだして、いのりければ、やがてたちてまひかなづ。人きどくの思ひをなして、これを見るに、はんじばかりまふてのち、さんわうおりみさせ給ひて、御たくせんこそおそろしけれ。しゆじやうらたしかにうけ給はれ、大とのきたのまん所は、けふ七日わが御まへに、こもらせ給ふ。御りうぐはん三つあり。まづ一つには、こんどてん（下）のじゆみやうを、たすけてたばせ給へ。さもさぶらば、この下でんにさぶらふ、もろゝのかたは人にまじはりて、一千日があひだ、みやづかひ申さんとなり。大とのゝ

きたのまんどころにて、よをよともおぼしめさで、すごさせ給ふ御心に、子をおもふみちにまよひぬれば、いぶせき事もわすれて、あさましげなる、かたは人にまじはりて、一千日があひだ、てうせきみやづかへ申さんと、おほせらるゝこそ、まことにあはれにおぼしめせ。二つには、大みやのはしどのより、八わうじの、御やしるまで、いらいらうつくりて、まいらせんとなり。三千の大しゆ、ふるにもてるにも、しやさんのとき、あまりに、いたはしければ、くはいらうつくられたらんは、いかにめでたからん。三つには八わうじのまへにてまい日たいてんなく、ほつけもんだうかう、おこなはすべしとなり。此御ぐはんは、いづれも、おろかならねどもかみ二つは、さなくともありなん、ほつけもんだうかうこそ、まことにあらまほしく、おぼしめせ。たゞしこんどのそしうは、やすかりぬべき事にて、ありつるを、かみ人みやじ、いころされ、きりころされて、しゆとおほく、きずをかうぶりて、なくくまいりて、うつたえ申すが、あまりに心うくて、いかならん世までも、わするべしとも、おぼしめさず。その上、かれらがはなつやは、しかしながら、わくわうすいじやくの、御はだへにたちたるなり。まことそら事は、これを見よとて、かたぬみだるを見れば、ひだりのわきのしたに、大きな、かはらけのくちほど、うげのあてぞ、見えたりける。これがあまりに、心うくて、いかに申とも、しやうの事は、かなふまじ。ほつけもんだうかう、いちぢやうあるべくは、三とせがいのちを、のべてたてまつらん。それにふそくに、おぼしめさば、ちからをよばずとて、さんわうはあがらせおはします。は、うへ、御心の中の、御りうぐはんなれば、人にかたらせ給はず、たれもら

しぬらんと、すこしもうたがふかたも、まします。御心のうちの事共を、ありのまゝに、御たくせんありければ、いよくしんかんにそみて、ことにたつとく、おぼしめして、なく／＼申させ給ひけるは、たとひ一日へんじにも、さぶらふとも、しかるべうこそさぶらふに、まして三とせが、いのちをのべて給はらん事こそ、まことにありがたふ候へとて、なく／＼御げかうありけり。やがてみやこへかへらせ給ひて、てんがの御りやう、きのくに、たなかのしやうといふところを、八わうじの御やしろへ、ゑいたいきしんせられけり。さればいまのよにいたるまで、ほつけもんだうかう、まい日たいてんなしとぞ、うけ給る。かゝりしほどに、ご二でうのくはんばく殿、御やまひかろませ給ひて、もとのごとくならせ給ふ。上下よろこびあはれしほどに、三とせのすぐるは、ゆめなれや、ゑい長二年になりけり。六月廿一日、又(ご)二でうのくはんばく殿、御ぐしのきはに、あしき御かさいできさせ給ひて、うちふしたまひしが、おなじき廿七日、御とし三十八にて、つゐにかくれさせ給ふ。御心のたけさ、りのつよさ、さしもゆゝしき人にて、おはしけれども、まめやかにことのきうになりしかば、御いのちをおしませ給ひけるなり。まことにおしかるべし。四十にだにもみたせ給はで、大とのにさきだちまいらせ給ふこそ、かなしけれ。かならずちゝをさきだつべしと、いふ事はなけれども、しやうじのおきてに、したがふならひ、まんどくゑんまんのせそん、十ぢくきやうの、大じたちも、ちからをよばぬ事どもなり。じひぐそくの、さんわうりもつのはうべんにて、ましますば、御とがめなかるべらともおぼえず。さるほどに、さんもんの大しゆ、こくしもろたか、るざいにしよせ

られ、もくだいもろつねを、きんごくせらるべきよし、そうもんどゝにをよぶといへども、御さいきよなかりければ、十ぜんじのまれうど、八わうじ三しやのしんよを、かざりたてまつりけるとぞ、きこえし。

み　こ　し　ぶ　り

おなじき、四月十三日、ひよしのさいれいを、うちとゞめて、ちんとうへふりたてまつる。さがりまつ、やなぎはら、かもがはら、たゞす、むめたゞ、とうほくみんのへんに、しら大しゆ、かみ人、みやじ、せんたう、みち／＼て、いくらといふかずをしらず、しんよは、一でうをしへいらせ給ふに、御しんぼうは、天にかゞやき、日月ちにおちたまふかと、おどろかる。これにて、源平りやうけの、大しやうぐんに、四はうのちんとうをかためて、大しゆをふせぐべきよし、おほせくださる。平家には、こまつのない大じんさ大しやう、しげもりこう、三千よきにて、おほみやおもての、やうめい、たいけん、ゆうはう、三つのもんをかため給ふ。しやていむねもり、とももり、しげひら、をちよりもり、のりもり、つねもり、なんどは、にしみなみのもんを、かため給ふ。げんじには、大うちしゆごの、源三ぬよりまさ、さきとして、そのせいわづかに三百よき、きたのぬいどのゝちんを、かため給ふ。ところはひろし、せいはすくなし、まばらにこそ、見えたりけれ。さんもんの大しゆ、ぶせいたるにて、きたのもん、ぬいどのゝちんより、しんよをいれたてまつらんとす。よりまさは、さる人にて、いそぎむま

なんじ——難治。

よりおり、かぶとを、ぬぎて、てうづうがひをして、しんよをはいしたてまつる。つはものども、みなかくのごとし、よりまさ、大しゆのなかに、いひつかはすむねあり。そのつかひには、わたなべの、ちやう七となふ、とぞきこえし。となふその日のしやうぞくには、きちんのひたれ、こざくらをきにかへしたるよろひきて、しやくどうづくりのたちをはき、廿四したるしらはのやおひ、しげどうのゆみわきにはさみ、かぶとをぬぎて、たかひばにかけ、しんよの御まへに、かしこまり、しばらくしづまれ候へ、大しゆの御中へ、げん三ぬにう道どの、申せと候。こんどさんもんの御せしう、御りうんのでう、もちろんに候。たゞし御せいはいちこそ、よそにても、いこんにおぼえ候へ。さればしんよを、此もんより、いれたてまつるべきにて候が、しかもひらきて、とをしたてまつるもんより、いらせ給ひて候ものならば、さんもんの大しゆは、めだりがほしけりなんと、京わらんべの、申さん事、ごにちのなんにや候はんずらむ、又あけていれたてまつれば、せんじをそむくにいたり。ふせぎたてまつれば、いわうさんわうにかうべをかたぶけたてまつる身が、ながくゆみやのみに、わかれなんす。かれといひ、これといひ、かたぐもつて、なんぢにこそ候へ。ひがしのちんとうは、こまつどの、大ぜいかため給ふ。それよりいらせ給ふべうもや候らんと、申たりければ、となふが、かくいふにふせがれて、かみ人、みやじ、しばらくここにひかへたり、わか大しゆあくそうどもは、なんでうそのぎあるべき。たゞ此ちんより、いれたてまつれ、といふやからも、おほかりけれども、らうそうどもの中に、三たふ一のせんぎしやと、きこえし、つのりつしや、がううん、すゝみいでゝ、もつ

ともこのぎいはれたり。われらしんよをさきだてまいらせて、そしうをいたさば、大ぜいのなかをかけやぶりてこそ、こうだいのきこえもあらんずれ。そのうへ、此よりまさは、げんじちやくくくのしやうとうゆみやをとりては、いまだそのふかくをきかず。をよそぶげいにもかぎらず、かだうにも、又すぐれたり。こんゑのみのんの御とき、たうぎの御くはいありしに、しんざんの花といふだいを、いだされたりしに、人々みなよみわづらひたりしに、このよりまさ、

みやまぎのそのこずゑとも見えざりし、さくらは花にあらはれにけり

と、いふめいかをつかまつり、御かんにあづかるほどの、やさおとこに、いかゞたうぎにのぞんで、ちじよくを、あたふべき。此しんよをかきかへしたてまつれやと、せんぎしたりければ、す千人の大しゆ、せんちんより、ごちんにいたるまで、みなもつともくどぞどうじけり。さてしんよを、かきかへしたてまつり、ひがしのちんどう、たいけんもんより、入たてまつらんとするに、らうぜきたちまちに、いできたりて、ぶしども、さんぐにいたてまつり、十ぜんしのみこしにも、やどもあまたいたてたり。かみ人、みやじ、いころされ、きりころされ、しゆとおほくきずをかうぶりて、おめきさけぶこそ、かみはぼんてんまでもきこえ、しもはけんらうちじんも、おどろきさはせ給ふらんとぞ、おぼえける。しんよをば、ちんどうにふりすて、たてまつりてなくくほんさんへこそかへりのぼりけれ。同廿五日、あんのてんじやうにて、にはかにくぎやうせんぎあり。さんぬるほうゑん四年、四月十三日、しんよじゆらくのとき、さすにおほせて、せき山のやしろへ、入たてまつる。又ほうあん、四ねん七月に、しんよ

じゆらくのときは、ぎをんのべつたうに、おほせて、ぎをんのやしろへ、いれたてまつり、こんどはほうあんのれいたるべしとて、ぎをんのべつたうに、ごん大そうづちようけんにおほせて、ぎをんのやしろへ、入たてまつる。さんもんの大しゆ、ひよしのしんよを、ちんどうへふりたてまつる事、ゑいきうより、このかた、ちしようまでは、六かどなり。されどもまいどまぶしをめしてこそふせがせらるゝに、かやうにしんよ、いたてまつる事は、これはじめとぞ、うけ給る。れいじんいかりをなせば、さいがいちまたにみつといへり。おそろし〜とぞ、人々申あはれける。さんもんの大しゆ、おびたゞしく、下らくすと、きこえしかば、しゆじやうようよにめして、夜のまに、おんの御しよ、ほふちうじどのへぎやうかうなる。中ぐうは、御くるまにめして、ぎやうけいあり。こまつのおとゞ、なほいに、やをふて、ぐぶせらる。ちやくしごんのすけせうしやうこれより、そくたいに、えびらやなぐひをふて、まいられけり。京中のきせん、きん中の上下、さはぎのゝしる事、おびたゞし。されども、さんもんには、しんよにやたち、かみ人、みやじ、いころされ、きりころされ、しゆとおほく、きずをかうぶりしかば、おほみや二のみや、かうだう、ちうだう、一うものこさず、やきはらつて、さんりん、まじはるべきよし、三千一どうに、せんぎす。これによて、大しゆ申ところ、御はからひあるべしと、きこえしほどに、平大なごんときたゞのきやう、そのときは、いまださゑもんのかみたりしが、上きやうにたつ。大かうだうのにはに、三たふくはいがうして、しやうきやうを、ひきはらんとす。しやかうぶりうちおとし、その身をからめとつて、みづうみにしづめよな

ぜんせい―善哉。

かねまさ―一方本、
忠親。

一せい―逸勢。

んどぞ、申ける。ときたゞきやう、さる人にて、いそぎふところより、こすゞりたゝふがみをとりにてゝ、おもふ事、一ふでかきて、大しゆのなかへつかはす。これをあけて見るに、しゆとのらんあくをいたすは、まえんのしよぎやうなり。めいわうのせいしをくはふるは、ぜんぜいのかごなりとこそ、かゝれたれ。大しゆこれを見て、もつともくどうじ、たにくへくだり、ばうくへぞ入にける。一し一くをもつて、三たう三千のいきどをりをやすめ、こうしのはちをのがれ給ひける、ときたゞのきやうこそ、ゆゝしけれ。同廿日、くはさんのみんの中なごんかねまさのきやう、しやうきやうにて、こくしもろたかを、るざいにしよせられ、もくだいこんどうはうぐわん、もろつねを、ごくちやうせらる。又さんぬる十三日しんよいたてまつりし、ぶし六人、きんごくせらる。これらはみな、小松どのゝさぶらひなり。同四月廿八日、ひぐち、とみのこうちより、ひいできたりて、京中おほくやけにけり。おりふしたつみの風、はげしうふきければ、大なるしやりんの、ごとくなる、ほのほが、三ちやう五ちやうをへだてゝ、とびこえくやけゆけば、おそろしなんども、おろかなり。あるひは、ぐへいしんわうのちぐさどの、あるひは、きたのの天神のこうばいどの、たちばなの一せいの、はひまつどの、おにどの、たかまつどの、かもぬどの、とう三でう、ふゆつぎのおとどの、かんみんどの、しうせんこうの、ほりかはどの、むかしいまのめいしよ、三十四かしよ、くぎやうのいゑだに、十六かしよまで、やけにけり。てん上人、しよ大夫の、いゑくは、しるすにおよはず。つみにはだいにふきつけ、しゆじやくもんより、はじめて、おうてんもん、くわいしやうもん、大ご

八せい―八省。
てうしよ―朝所。

(あ)

くでん、ぶらくもん、しよし、八せい、てうしよに、いたるまで、一ときが、うちに、くわいじんのちとぞ、なりにける。いゑくゝのにつき、だいくゝのもんじよ、七ちんまんぼう、さながら、ちりはいとぞなりぬ。そのあひだのつゐえ、いかばかりぞ。人のやけしぬる事、す百人、ぎうばのたぐひ、かずをしらず。これたゞ事にあらず、さんわうの、御とがめとて、ひゑいざんより、大なるさるども、二三千おりくだりて、てゝに、まつにひをともして、京中をやくとぞ、人のゆめには、見たりける。大くでんは、ぢやうぐはん十八年に、はじめて、やけたりければ、同十九年、正月三日、やうぜいみんの、御そくゐは、ぶらんゐんにてぞありける。げんけい元年、四月九日、ことはじめありて、同二年十月八日にぞ、つくりいだされける、天喜五年、二月廿六日に、又やけにけり。ちしう四年四月十五日に、ことはじめありしかども、いまだつくりいだされざるに、これいぜいみん、ほうぎよなりぬ。ご三でうみんの御う、えんきう四ねん、四月十五日に、つくりいだされて、せんかうなしたてまつり、ぶんじんしをたてまつり、れい人がくをそうしけり。いまは世のするになつて、くにのちからもおとろへたれば、そのちはずみにつくられず。

ちしう―一万本
治暦四年八月
十五日